

2016年度学院留学 研究成果概要

種 別：学院留学（長期）
所属・職・氏名：経済学部・教授・原田哲史
研究課題：ドイツ経済思想史の研究
留学期間：2016年4月1日～2017年3月31日
留学先：ドイツ連邦共和国ベルリン市、ベルリン・フンボルト大学

研究成果概要（日本文（全角）の場合は3,000字（A4、2ページ）程度）

フンボルト大学図書館とベルリン国立図書館でドイツ経済思想史に関する資料を閲覧・複写し、それに基づいて論文・講演を作成するなかで、次のような研究活動を行い、成果をあげた。

< I. 研究成果 >

1. 論文の作成

— 論文 “Noboru Kobayashi’s Research on Friedrich List: A Contribution on List Reception and Interpretation in Japan”（「小林昇によるフリードリヒ・リスト研究: 日本におけるリスト受容と解釈」）を執筆し、脱稿した。この論文は、2014年に日本代表として招かれたロイトリンゲンでの国際学会 “Conference Dedicated to the 225th Anniversary of Friedrich List” でのドイツ語での報告に、ベルリンで収集した資料でもって大幅に手を加えつつ、英語論文とし書き換えて完成させたものであり、同国際学会の成果として出版される共著図書（英文）に収録されるものである（16年11月脱稿）。

2. 講演

— 講演 “Friedrich List’s Economic Thought as an Embodiment of the Serious Destiny of German Capitalism”（「ドイツ資本主義の深刻な宿命としてのフリードリヒ・リストの経済思想」）を、フランクフルト・アム・マイン大学（＝ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学）経済学部の経済学・経済理論講座に招かれ、同学部で行った。ベルトラム・シェフォールト教授や出席者との討論で多くの有益な示唆を得た。とりわけ、小林昇によるリスト思想の間接的なナチズムへの系譜の指摘について、その場で活発な賛否両論の討論が展開されたことは、示唆に富んだ（16年5月）。

— 講演 „Friedrich List und Justus Möser aus japanischer Perspektive“（「日本の視点からのフリードリヒ・リストとユストゥス・メーザー」）を、オスナブリュック歴史・民俗学協会に招かれ、ツィマーリエン・ホール（＝オスナブリュック大学図書館ホール）で行った。メーザー協会会長マルティン・ズィームゼン氏や出席者との討論で多くの有益な示唆を得た。とりわけ、啓蒙思想でありながらも保守的多元主義を有するメーザーの思想は、硬直した啓蒙思想よりも他の諸国（例えば日本）にとって意味がある、という点について議論されたのは、大変示唆に富むものであった（16年10月）。

— 講演 „Adam Müllers Generationenethik“（「アダム・ミュラーの世代間倫理」）を、フランクフルト・アム・マイン大学（＝ヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学）経済学部の経済学・

経済理論講座に招かれ、同学部で行った。ベルトラム・シェフォールト教授や出席者との討論で多くの有益な示唆を得た。保守的分権主義者でありながらも進歩を望みかつ単純な工業力の突出による経済発展については懐疑的なミュラーの思想が今日の環境問題を考慮に入れても重要であるという講演の要点は、出席者に感銘を与えることができた。討論も活発であり、大学院生や学部学生からはその場のみならず E メールによって賛意・質問が出されるほどであった（17年1月）。

3. 学会への出席

— „Ausschuss für die Geschichte der Wirtschaftswissenschaften, Verein für Socialpolitik“（「社会政策学会経済学史委員会」）の年次大会（カールスルーエ）に正会員（委員）として出席し、諸報告から、ならびに出席者との意見交換から、多くの有益な示唆を得た。とりわけ、ドイツ語圏における経済学史・経済思想史研究の核となるこの会合において、当地での研究動向を知ることができ、大変有意義であった。

4. その他の会合への出席

— „Jahresempfang der IHK Frankfurt am Main 2017: Chancen für Wirtschaftsstandort Frankfurt“（「フランクフルト・アム・マイン商工会議所 2017 年初レセプション——経済立地フランクフルトにとってのチャンス」）に招待され、諸報告（商工会議所会頭、ヘッセン州知事、フランクフルト市長による）から多くの有益な示唆を得た。とりわけ、イギリスの EU 離脱があっても逆にフランクフルトの金融・経済にとっては外国資本が流入する可能性があるためこれまでと同様（あるいはそれ以上に！）フランクフルトの経済は好調を続けるであろうという自信に満ちた発言は、大変示唆に富むものであった（17年1月）。

5. 調査

— マルティン・ルターが「95 か条の論題」をヴィッテンベルク大学の城教会張り出したことを皮切りにプロテスタント運動が生成した 1517 年から 500 周年の記念すべき 2017 年に、ヴィッテンベルクを訪問し、城教会やルターの居所などを見分し、調査した。その比較として、ローマ・カトリック教会の総本山であるローマのサン・ピエトロ寺院ならびに併設のヴァティ館博物館にも訪問した。絢爛豪華なカトリックの総本山にくらべて、信仰を唯一とし勤勉を重んじるプロテスタントの発祥の地の質素なたたずまいを実感することができ、プロテスタントの社会経済観を把握するうえで大変有意義であった。

< II. その他の活動 >

以上の（狭義の）研究成果に加えて、本滞在のもうひとつの目標であったフンボルト大学と本学との協定締結の可能性を模索した点について、とりわけその顛末について補足したい。

すでに出発直前、その意を国際関係担当副学長の神余隆博教授名で先方に打診したが、その返答は、日本の大学との新たな姉妹提携は現在のところ考えていないというものであった。

しかし、この返答者は十分に責任のある代表者とは思えなかったもので、2016 年 6 月神余副学長のベルリン訪問の際、フンボルト大学の国際関係担当副学長ミヒャエル・ケムパー・ファン・デン・ボーガルト教授に神余副学長と私（CIEC 谷井信一氏も同席）が会見し、詳細を説明するとともに、その意を問うた。とはいえ、ケムパー・ファン・デン・ボーガルト教授の返答も基本的に同じで、自分たちはすでに多くの日本の大学と姉妹提携しているがそのなかでも活発な交流がなされていないものが多い状況において、その数を削減することを考えているほどであり、ましてや新たに日本の大学と姉妹提携する意向はない、というものであった。

したがって、交渉は断念せざるをえなかった。

今後そうした提携を考えるなら、大学間の協定を提案する前に学部間の交流から始めていくという方途がないわけではないが、フンボルト大学での私の所属機関は教育学研究所であり、本学での所属である経済学部との交流を促すのは不可能であった。その他、フンボルト大学での日本学系列の機関との交流も無きにしもあらずであるが、現在先方の日本学部門は弱体化しており、それも容易ではないと思われた。ただ、かろうじて同大がなお運営している森鷗外記念館においては、館長のハーラルト・ザロモン講師が交流に好意的であったことを付記しておきたい。

研究成果概要のデータは、gakunai@kwansei.ac.jpまで提出してください。